

稚内北星学園大学 2019 年度卒業式・式辞

本日、晴れて卒業を迎えられたみなさん、おめでとうございます。卒業生のご家族のみなさまにも、お喜びを申し上げます。例年であれば、続いてご来賓のみなさまへの謝辞を述べるところですが、残念ながら今回は卒業生、保護者、教職員のみでの開催となりました。それでも、全道的にはほとんどの大学で卒業式の開催自体が中止されている中、規模が小さいということが功を奏してこのような場を設けることができたことをうれしく思います。

さて、みなさんの入学した 2016 年は、アメリカ大統領選挙などの政治をめぐって「ポスト真実」という言葉が使われだしたころでした。具体的な政策や客観的な事実よりも、感情へのアピールの方が力を持って世論が形成される状況のことです。そこでは「フェイクニュース」も「信じたい事実」として流通します。また特定の民族や国籍をターゲットにして差別と憎悪を扇動する「ヘイトスピーチ」も目立つようになってきました。

そうした事態は必ずしも最近になって初めて起きているわけではありませんが、SNS などのソーシャルメディアを通じて人々が情報の受発信をするようになったことで、新しい広がりを見せているというのは事実です。テレビ・新聞などのマスメディアが伝えないことを、ネットは伝えるからです。

政治レベルの事例ではありませんが、たとえばここ稚内でも、ブラックアウトの際の「水道が使えなくなる」、今回のマスク不足に端を発した「トイレトペーパーがなくなる」といった誤った情報が SNS 内に拡散し、一部の人々を不適切な行動に導きました。不安の感情があおられたのです。

他方、その同じメディアは「MeToo」運動の基盤になったり、マスメディアが目撃しない事実に光を当てたりすることで、人々に新しいつながりや知の基盤を与えてもいます。そして本学においてみなさんが学んだことは、まさしく情報メディアを社会に役立てること、人々に力を与えることを目標とした理論とスキルでした。流通する情報を正しく選択、理解するにとどまらず、情報メディアで社会に新しい価値を生み出せるよう、自ら活用し、創り、表現する、そうした力を身につけてきたのです。

特にみなさんは、地域の中で、地域の人々との具体的なつながりの中で学ぶことができました。このことは大きな強みです。4 年前は COC 事業の 3 年目で、活動が軌道に乗ってきていた時期でした、その中で、〈街を教室に〉して学ぶとともに、存分に活躍し、重要な役割を果たしたのです。

「地域学」などの授業では地元の産業や文化についてその現場に即して認識を深めまし、その他の科目でも、地域課題と結び付けて考察する機会が少なくなかったはずで

そして小中学生への学習支援や子どもの貧困問題への取り組みは、地域の教育力向上に貢献しましたし、コーヒーフェスティバルは地域アイデンティティの再発見に寄与し市民イベントとして定着することとなりました。数多くの受賞を果たしてきた映像作品は、地域情報の発信および地域課題の問題提起という点で大きな力を発揮し、まちラボでの市民との交流やさまざまなイベント、プロジェクトでの活躍は、「学生がんばってるね」という評価を得ることとなっています。

そうした実践的な学びは、みなさんのこれからの仕事や活動においても必ずや生きた知恵となって力を発揮するに違いありません。「ポスト真実」でも「フェイク情報」でもない、生の現実と人とのつながりを基盤にして正しく現実を認識し、そこに情報メディアを活用し新しい価値を吹き込む。稚内北星学園大学だからことを学べたことをどうぞ大切にしてください。

この1年間は、本学の存廃をめぐってさまざまな動きがあり、みなさんにとっても落ち着かない状況であったかと思います。しかし、みなさんの母校は、残ります。みなさんがここに遺した足跡は残り、これからの学生に引き継がれていきます。本学での4年間の経験に誇りと自信をもって巣立ち、たくましく生き、社会のために活躍してくださるようお願いを込めて、式辞といたします。

2020年3月20日
稚内北星学園大学 学長 斉藤吉広